沖縄考古学ニュース

沖縄県立博物館・美術館
Okinawa Prefectural Museum & Art Museum

ごあいさつ

沖縄県立博物館・美術館の博物館企画展「沖縄考古学ニュース」の開催にあたり、ごあいさつを申し上げます。

考古学とは、発掘調査などで得られた資料を研究して、過去を明らかにしていく学問です。本来発掘調査は「過去を明らかにする」という学問的理由や、「遺跡の範囲確認や整備を行う」という保護・活用といった理由がきっかけとなって行われるべきものです。しかし実際は、ビルや道路などの建設工事によって遺跡が破壊されるので、事前に発掘調査をやるという消極的な理由がきっかけとなる場合が多くを占めます。平成８年度のピーク時に比べると発掘調査の件数は減少していますが、それでも全国で年間約9000件の発掘調査が行われており、テレビや新聞をにぎわすような成果が数多く上がっています。

沖縄県内では年間数十件の発掘調査が行われており、先人達の生活をうかがい知ることができるさまざまな資料が出土しています。その成果は現地説明会や展示会、発掘調査報告書などの形で公開されています。

今回の企画展では、近年沖縄県内で行われた発掘調査の成果や、修復された考古資料、国の史跡に指定された遺跡について展示いたします。この展示会をとおして、考古学や文化財に対する関心を高めていただく機会となることを期待します。

展示会の開催にあたり、貴重な資料をお貸しくださいました関係各位の皆様に厚くお礼を申し上げます。

平成21年１月９日

沖縄県立博物館・美術館
館長　牧　野　浩　隆

凡　例

1　この図録は、2009年1月9日から3月1日まで開催される博物館企画展「沖縄考古学ニュース」の図録である。なお、本企画展は「発掘された日本列島2008」の地域展として開催した。

2　2003年以降に発掘調査された遺跡、発掘調査報告書が刊行された遺跡、史跡に指定された遺跡、修復された考古資料を対象とした。

3　沖縄の時代名称については「貝塚時代」は使用せず、「縄文時代」「弥生～平安並行時代」を使用した。「弥生～平安並行時代」を時期区分する際は、「弥生時代並行期」「弥生～古墳時代並行期」などとした。

4　年代については特に表記がない限り、国立歴史民俗博物館が2003年に発表した暦年較正年代を使用した。弥生時代の始まりについては、紀元前500年頃とした。

5　本書の執筆・写真撮影・作図・編集は当館の羽方誠が担当した。

6　図録の写真・図の無断使用を禁じる。

目　次

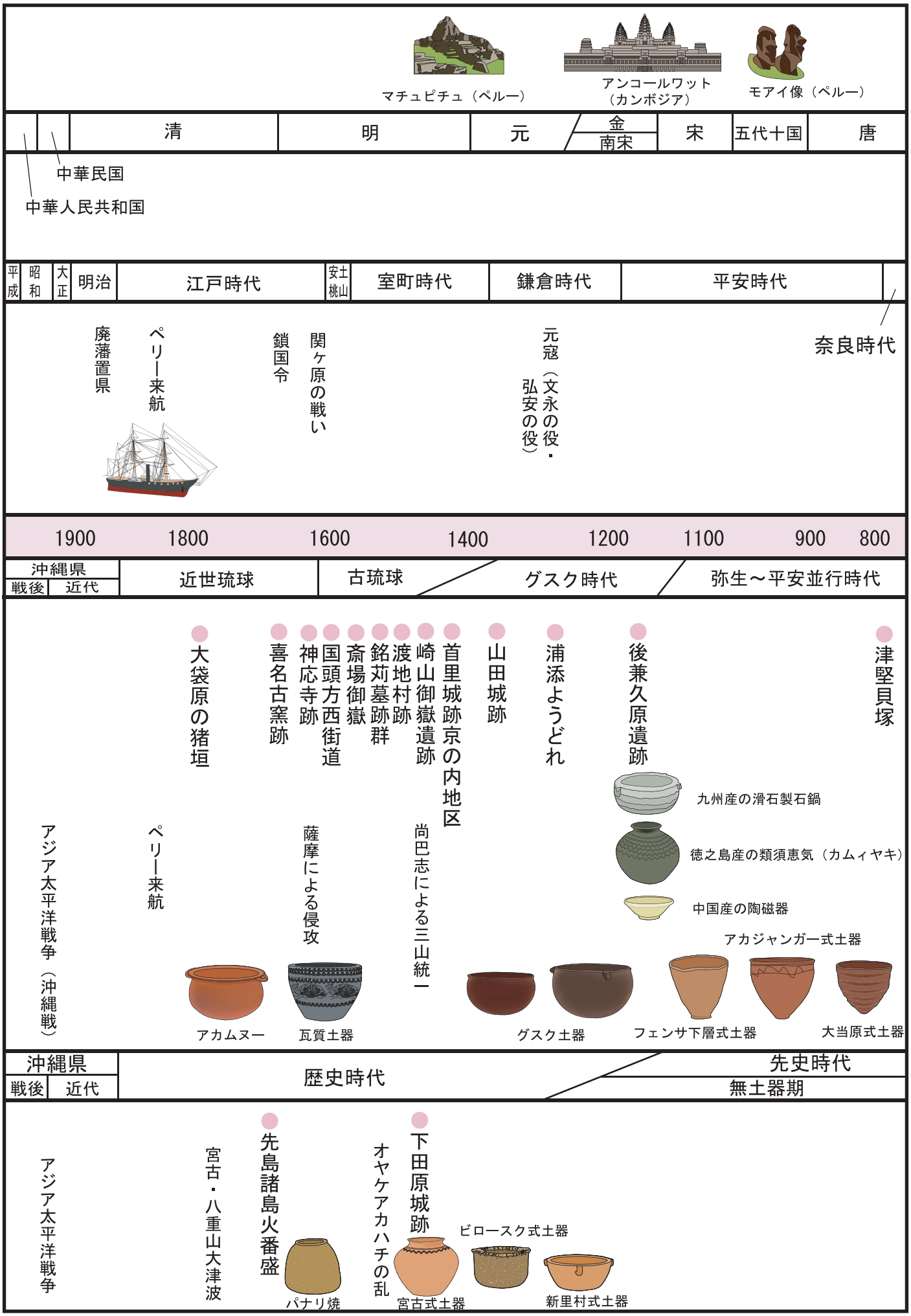
年表……2
出品遺跡の分布図……4

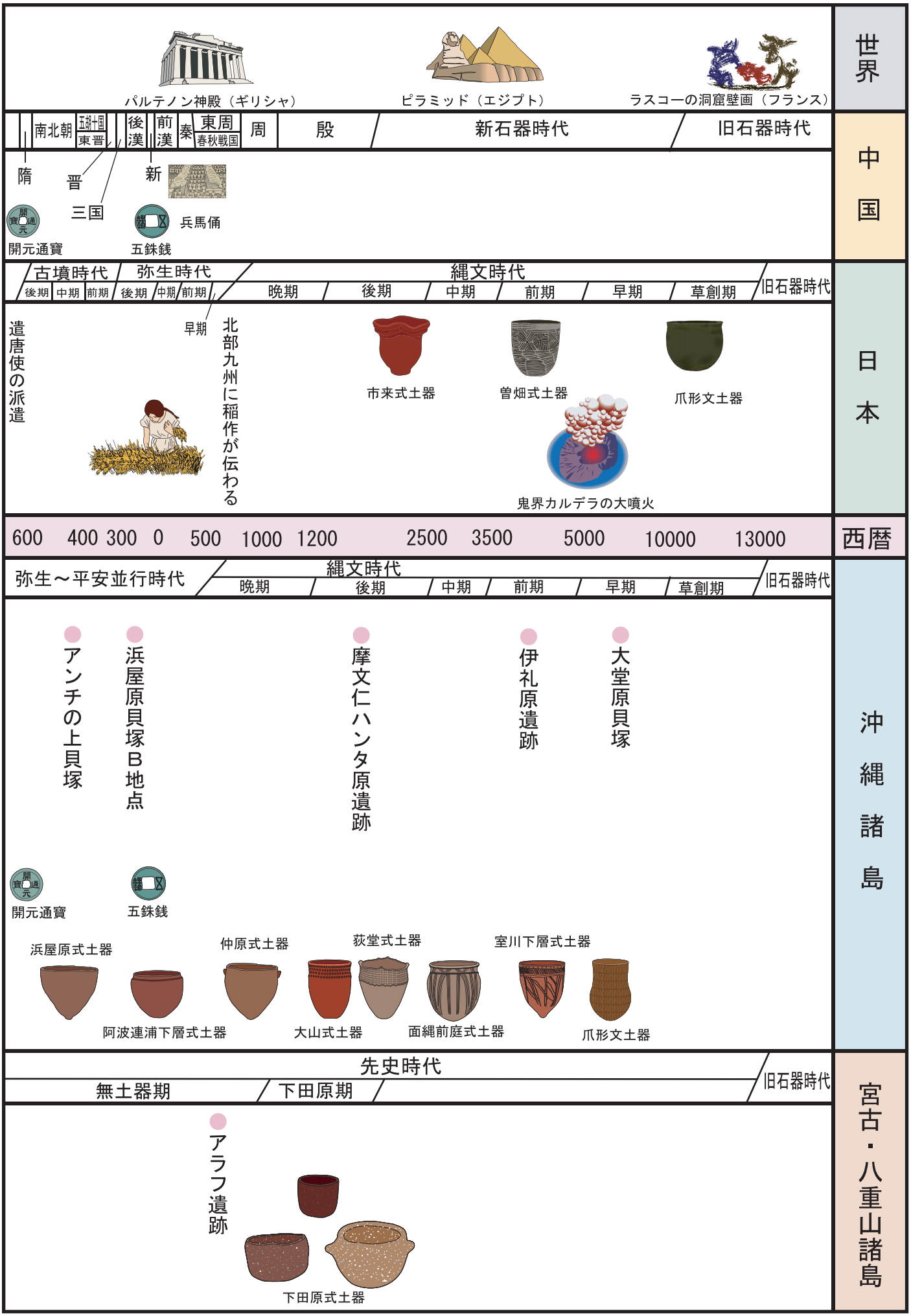
第１章　発掘調査の成果
1　旧石器時代……5
2　縄文時代……6
3　弥生～平安並行時代……14
4　グスク時代……20
5　近世・近代……28
6　宮古・八重山諸島……34

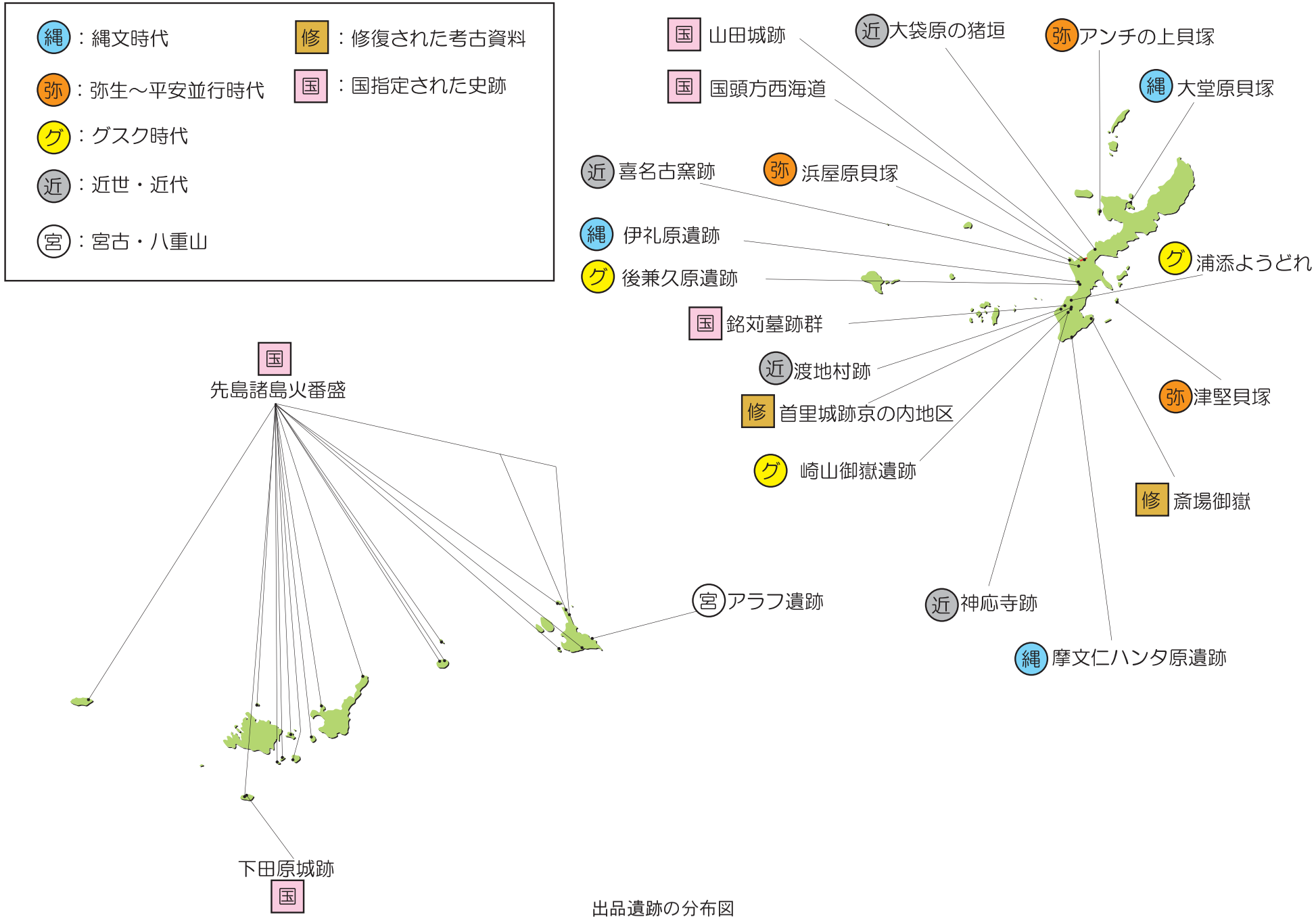
第２章　文化財の保存・活用
1　修復された考古資料……36
2　国から指定された史跡……40

第３章　文化財保護行政の現状
1　米軍基地内の発掘調査……50
2　発掘調査の件数・体制・方法……51

図版目録……52
参考・引用文献……54
あとがき……55


マチュピチュ（ペルー）
アンコールワット（カンボジア）
モアイ像（ペルー）
清
明
元
金
南宋
宋
五代十国
唐
中華民国
中華人民共和国
平成
昭和
大正
明治
江戸時代
安土桃山
室町時代
鎌倉時代
平安時代
奈良時代
廃藩置県
ペリー来航
鎖国令
関ヶ原の戦い
元寇（文永の役・弘安の役）
1900
1800
1600
1400
1200
1100
900
800
沖縄県
戦後
近代
近世琉球
古琉球
グスク時代
弥生～平安並行時代
大袋原の猪垣
喜名古窯跡
神応寺跡
国頭方西街道
斎場御嶽
銘苅墓跡群
渡地村跡
崎山御嶽遺跡
首里城跡京の内地区
山田城跡
浦添ようどれ
後兼久原遺跡
津堅貝塚
九州産の滑石製石鍋
徳之島産の類須恵気（カムィヤキ）
中国産の陶磁器
アカジャンガー式土器
アジア太平洋戦争（沖縄戦）
ペリー来航
薩摩による侵攻
尚巴志による三山統一
アカムヌー
瓦質土器
グスク土器
フェンサ下層式土器
大当原式土器
沖縄県
戦後
近代
歴史時代
先史時代
無土器期
アジア太平洋戦争
宮古・八重山大津波
先島諸島火番盛
オヤケアカハチの乱
下田原城跡
パナリ焼
宮古式土器
ビロースク式土器
新里村式土器


世界
パルテノン神殿（ギリシャ）
ピラミッド（エジプト）
ラスコーの洞窟壁画（フランス）
中国
南北朝
五胡十国
東晋
後漢
前漢
秦
東周
春秋戦国
周
殷
新石器時代
旧石器時代
隋
晋
三国
新
開元通寶
五銖錢
兵馬俑
日本
古墳時代
弥生時代
縄文時代
後期
中期
前期
後期
中期
前期
晩期
後期
中期
前期
早期
草創期
旧石器時代
遣唐使の派遣
早期
北部九州に稲作が伝わる
市来式土器
曾畑式土器
爪形文土器
鬼界カルデラの大噴火
西暦
600
400
300
0
500
1000
1200
2500
3500
5000
10000
13000
沖縄諸島
弥生～平安並行時代
縄文時代
晩期
後期
中期
前期
早期
草創期
旧石器時代
アンチの上貝塚
浜屋原貝塚B地点
摩文仁ハンタ原遺跡
伊礼原遺跡
大堂原貝塚
開元通寶
五銖錢
浜屋原式土器
阿波連浦下層式土器
仲原式土器
大山式土器
荻堂式土器
面縄前庭式土器
室川下層式土器
爪形文土器
宮古・八重山諸島
先史時代
旧石器時代
無土器期
下田原期
アラフ遺跡
下田原式土器


縄：縄文時代
弥：弥生～平安並行時代
グ：グスク時代
近：近世・近代
宮：宮古・八重山
修：修復された考古資料
国：国指定された史跡
国 山田城跡
近 大袋原の猪垣
弥 アンチの上貝塚
国 国頭方西海道
縄 大堂原貝塚
近 喜名古窯跡
弥 浜屋原貝塚
縄 伊礼原遺跡
グ 浦添ようどれ
グ 後兼久原遺跡
国 銘苅墓跡群
近 渡地村跡
弥 津堅貝塚
修 首里城跡京の内地区
グ 崎山御嶽遺跡
修 斎場御嶽
宮 アラフ遺跡
近 神応寺跡
縄 摩文仁ハンタ原遺跡
国 先島諸島火番盛
下田原城跡
国

出品遺跡の分布図

第１章　発掘調査の成果

１　旧石器時代

沖縄では港川フィッシャー遺跡（八重瀬町）や山下町第一洞穴（那覇市）などで旧石器時代の人骨が発見されている。しかし彼らが使った石器については見つかっておらず、山下町第一洞穴から発見された３点の石などごく一部の資料が旧石器ではないかと言われている状況である。

近年の調査では、旧石器時代の確実な石器は発見されていない。そのような中、沖縄県立博物館・美術館と更新世（こうしんせい）遺跡調査団（国立科学博物館・東京大学・沖縄の研究者）が共同で旧石器時代の人骨を探す調査を2006年から開始しており、今後の調査が期待されている。

南城市武芸洞（ぶげいどう）の調査

武芸洞での見学会

武芸洞で発見された縄文時代晩期頃の埋葬（まいそう）人骨

2　縄文時代

伊礼原遺跡（縄文時代早期～現代　北谷町字伊平）

伊礼原遺跡は標高５ｍの低地に広がる遺跡である。1996年度に発見され、1999～2004年度に本格的な発掘調査が行われた。

遺跡は海側から砂丘区、低湿地区の２地区に分けられる。砂丘区では縄文時代中期～弥生時代並行期の生活跡が発見された。低湿地区では、縄文時代早期～晩期にかけての生活跡が発見された。

7000年の歴史を物語る資料

伊礼原遺跡に人が住み始めたのは、約7000年前の縄文時代早期である。遺跡の近くにはウーチヌカーと呼ばれる湧き水があり、飲み水として利用していたようである。

約4000年前（縄文時代後期）と2000年前（弥生時代中期並行期）の２回にわたって、砂丘区の地形が変わるほどの津波に襲われた痕跡が、土層断面に残されていた。

約800年前（グスク時代）になると遺跡一帯はマングローブ林となり、沖縄戦前には水田が営まれていた。

特に縄文時代早期～弥生時代並行期については土器、石器、木製品、貝製品、骨製品などさまざまな資料が発見されいる。

貴重な木製品

低湿地区には近くに湧き水があるため、遺跡の土が水分を多く含んでいた。そのため空気が遮断され、植物質を分解する菌類が生きていけず、通常は残りにくい木製品や木の実などが多数発見された。

縄文時代前期の資料には、笊と石斧の柄がある。笊は四隅を杭で固定しており、中にはシイの実が入っていた。石斧の柄はクチナシを素材としており、加工途中の状態である。いずれも県内最古の木製品である。縄文時代中期の木製容器は、現在日本には自生していないショウナンボクを素材としている。縄文時代後期の櫛は、ヤエヤマコクタンを素材としている。

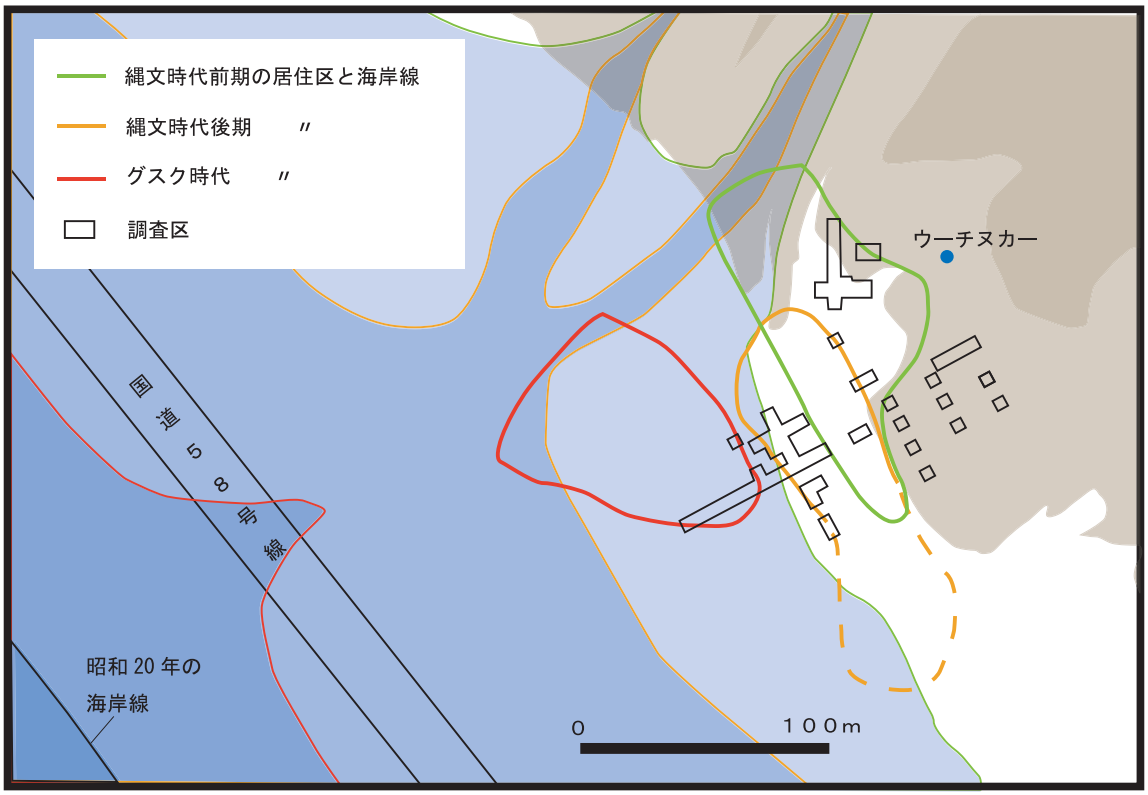
伊礼原遺跡の位置

ウーチヌカー

砂丘区の遠景

低湿地区の遠景

竪穴式住居跡



地形変遷図

伊礼原遺跡（低湿地区）の土層

フェンサ下層式土器

大当原式土器（うふとうばる）

縄文晩期土器

荻堂式土器（おぎどう）

面縄東洞式土器（おもなわとうどう）

面縄前庭式土器（おもなわぜんてい）

曽畑式土器（そばた）

室川下層式土器（むろかわかそう）

爪形文土器（つめがたもん）

石器

骨製品

翡翠（ひすい）製品

貝輪

笊（ざる）

木の実

櫛

石斧の柄

木製容器

大堂原貝塚（縄文時代早期～古墳時代並行期　名護市済井出）

大堂原貝塚は屋我地島の北部にあり、古宇利大橋の建設工事に先立って1998年～2003年度にかけて発掘調査が行われた。

調査の結果、縄文時代早期の土器をはじめ、縄文時代前期の埋葬人骨、弥生時代の九州の土器など貴重な発見が相次いだ。

県内最古の埋葬人骨

2003年、縄文時代前期の層から２体の埋蔵人骨が発見された。２体は１mほど離れて横に並び、頭を北に向けていた。２体とも下半身の一部が残っている状態であり、仰向けで足を伸ばした状態で埋葬されたと考えられている。

沖縄では渡具知東原遺跡（読谷村）で縄文時代前期の大腿骨が１点発見されているが、埋葬状態は不明であった。大堂原貝塚の２体の人骨は埋葬状態を知ることができる県内最古の事例であり、貴重な発見となった。

遺跡の遠景

現地説明会の様子

発掘調査の様子

イモガイの集積（弥生時代並行期）

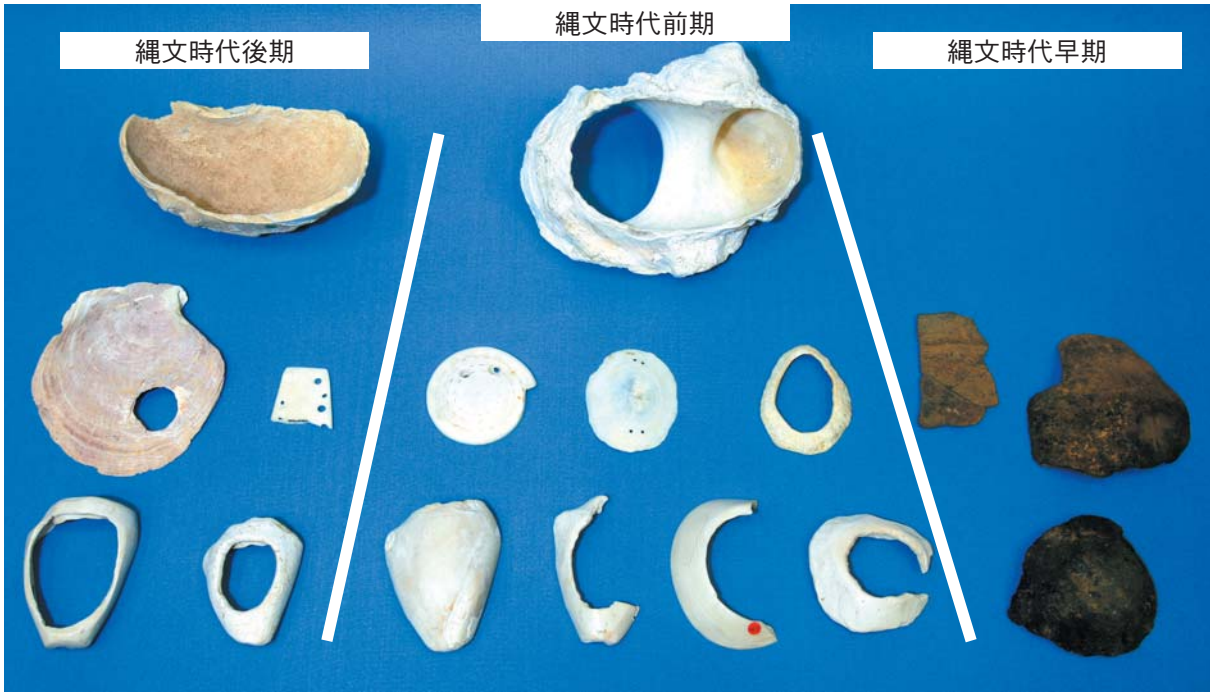
古墳時代並行期の土器

弥生時代並行期の人骨

１号・２号人骨の出土状況

１号人骨

２号人骨



縄文時代の出土品

摩文仁ハンタ原遺跡（縄文時代後期～弥生時代前期並行期　糸満市摩文仁）

摩文仁ハンタ原遺跡は糸満市南部の海岸近くにある岩陰墓で、2007年に土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアムと糸満市教育委員会が合同で発掘調査を行った。

岩陰墓から見つかった人骨は改葬されており、数十体にも及ぶ。また一緒に出土した土器から縄文時代後期～晩期頃のものであることがわかった。

貝製品いろいろ

岩陰墓からは人骨とともにさまざまな貝製品が出土した。貝製品はほとんどが装飾品で、こまやかな細工が施されており、加工技術の高さがうかがえる。

遺跡の遠景

遺跡の近景

発掘調査の様子

貝製品の出土状況②

貝製品の出土状況①

人骨の出土状況

貝輪

めずらしい形の貝製品

線刻された貝製品

さまざまな貝製品、骨製品

3　弥生～平安並行時代

浜屋原貝塚B地点（弥生～古墳時代並行期　読谷村字宇座）

浜屋原貝塚がある読谷村西海岸沿いは弥生～平安並行時代の遺跡が密集する場所である。浜屋原貝塚は北からD・B・A・Cの４地点があり、合わせて浜屋原貝塚群と呼ぶ。

浜屋原貝塚B地点は、道路工事に先立って平成17年度に発掘調査が行われた。その結果、貝の集積や土器、銅鏃などが出土した。

漢式三翼鏃はなぜ沖縄にもたらされたのか

銅鏃は弥生時代～古墳時代にかけて使われたが、特に中国で作られた漢式三翼鏃は全国的に見ても出土数が少ない。青銅器の出土数自体が非常に少ない時代の沖縄で、宇堅貝塚群に続いて2例目の漢式三翼鏃が出土したのはなぜだろうか。

この時代の沖縄の遺跡からは、しばしばイモガイやゴホウラといった南海産大型巻貝の集積が発見されている。これは主に貝輪を作るための材料を一か所に集めたものと考えられている。浜屋原貝塚B地点からもゴホウラの集積が見つかっており、貝輪を欲しがる九州を相手にした貝交易の一端を担っていた遺跡と考えられる。この貝交易を通じて、漢式三翼鏃が沖縄にもたらされた可能性がある。

浜屋原貝塚の遠景

ゴホウラの集積

漢式三翼鏃（左が浜屋原貝塚Ｂ地点出土、右が宇堅貝塚群出土）

アンチの上貝塚（弥生～古墳時代並行期　本部町字瀬底）

アンチの上貝塚は瀬底島の東部、沖縄島と瀬底島を結ぶ橋のたもとにある。遺跡がある場所に個人住宅を建築することになり、2002年度に発掘調査が行われた。

200㎡が調査された結果、貝や石器の集積遺構が見つかった。また土器や貝錘、貝輪などが見つかった。

大量のイモガイ

アンチの上貝塚で見つかった５基の貝集積のうち、４基はイモガイだけの集積、１基はイモガイやゴホウラなどを混ぜた集積だった。４基のイモガイ集積のうち、隣り合って発見された３号・４号はそれぞれ77個、117個という大量のイモガイを集積している。

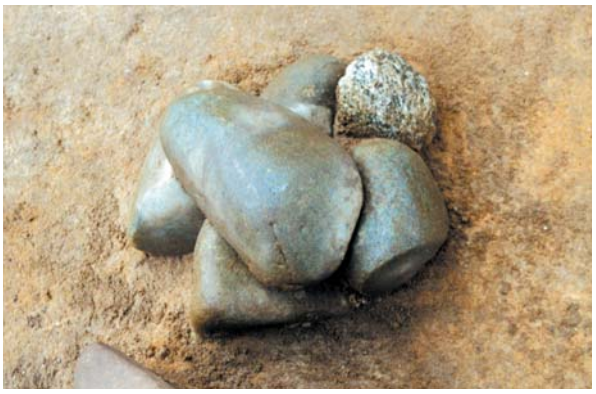
イモガイとは、イモガイ科の巻貝の総称で、円錐の形に近い。大型のイモガイは貝輪（貝の腕輪）や貝符（文様が刻まれていて、長方形のお守りのような形をした製品）などに加工された。

貝輪の材料となるイモガイやゴホウラなどの大型の貝は、沖縄の海のように珊瑚礁が広がる暖かい海に生息している。貝輪は沖縄でも使われたが、弥生時代の北部九州を中心とした地域でより流行した。

貝輪などを作るための貴重な材料であったイモガイがなぜ大量に残されていたのだろうか。

アンチの上貝塚　遠景

発掘調査の様子



石器の集積

3号・4号イモガイ集積

4号イモガイ集積のイモガイ

津堅貝塚（弥生～平安並行時代　うるま市勝連字平安名）

津堅貝塚は津堅島の南側、海岸砂丘上に形成された遺跡である。道路工事に先立ち、2003年に発掘調査が行われた。調査の結果、イモガイの集積7基、シャコガイの集積が１基見つかった。また土器や石器、貝製品などの遺物が見つかった。

土器に見る先人の造形美

津堅貝塚からは、全形を知ることができる土器が多数見つかった。土器のほとんどは大当原式土器、アカジャンガー式土器と呼ばれるものである。これらは文様を持たない場合が多く、津堅貝塚の土器も例外ではない。ただ津堅貝塚では文様を持つ土器も一定量出土しており、中には粘土紐を貼り付けて、記号のようにも見える文様を口縁部にめぐらせている場合もある。

土器の形や文様は、先人たちの造形美のあらわれでもある。

発掘調査の様子

イモガイの集積

土器の出土状況

いろいろな形の土器

土器の口縁部に描かれた文様

4　グスク時代

浦添ようどれ（13世紀頃～現在　浦添市仲間）

浦添ようどれとは、英祖王・尚寧王と彼らの一族が葬られたとされる墓である。浦添城跡の崖下に造られた２つの墓室と、それを二重・三重に取り囲む石積みから成っている。

1996～2004年度にかけて発掘調査が行われた結果、浦添ようどれの歴史を明らかにする貴重な発見が相次いだ。

金属製品の工房

二番庭の石積み付近から、鉄や銅を加工した工房跡が発見された。工房跡からは坩堝や金床石など金属の加工に使う道具をはじめ、加工の際に生じた鉄滓や銅の切りくず、製品化された釘や飾り金具などが発見された。

また金属工房跡の近くから大量の高麗系瓦が見つかった。これらの瓦は、墓室にあった建物の屋根に葺かれていたものだと考えられている。

遺跡の近景

工房跡で見つかった金床石

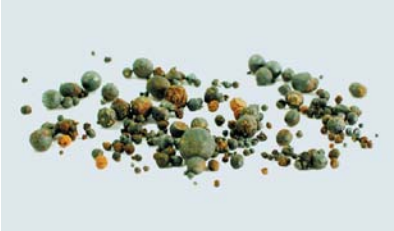
坩堝

鞴の羽口

炉壁

鉄滓

鍛造剥片



粒状滓

菱形笠鋲

脚先金具

屋根に葺かれた瓦

復元整備された浦添ようどれ

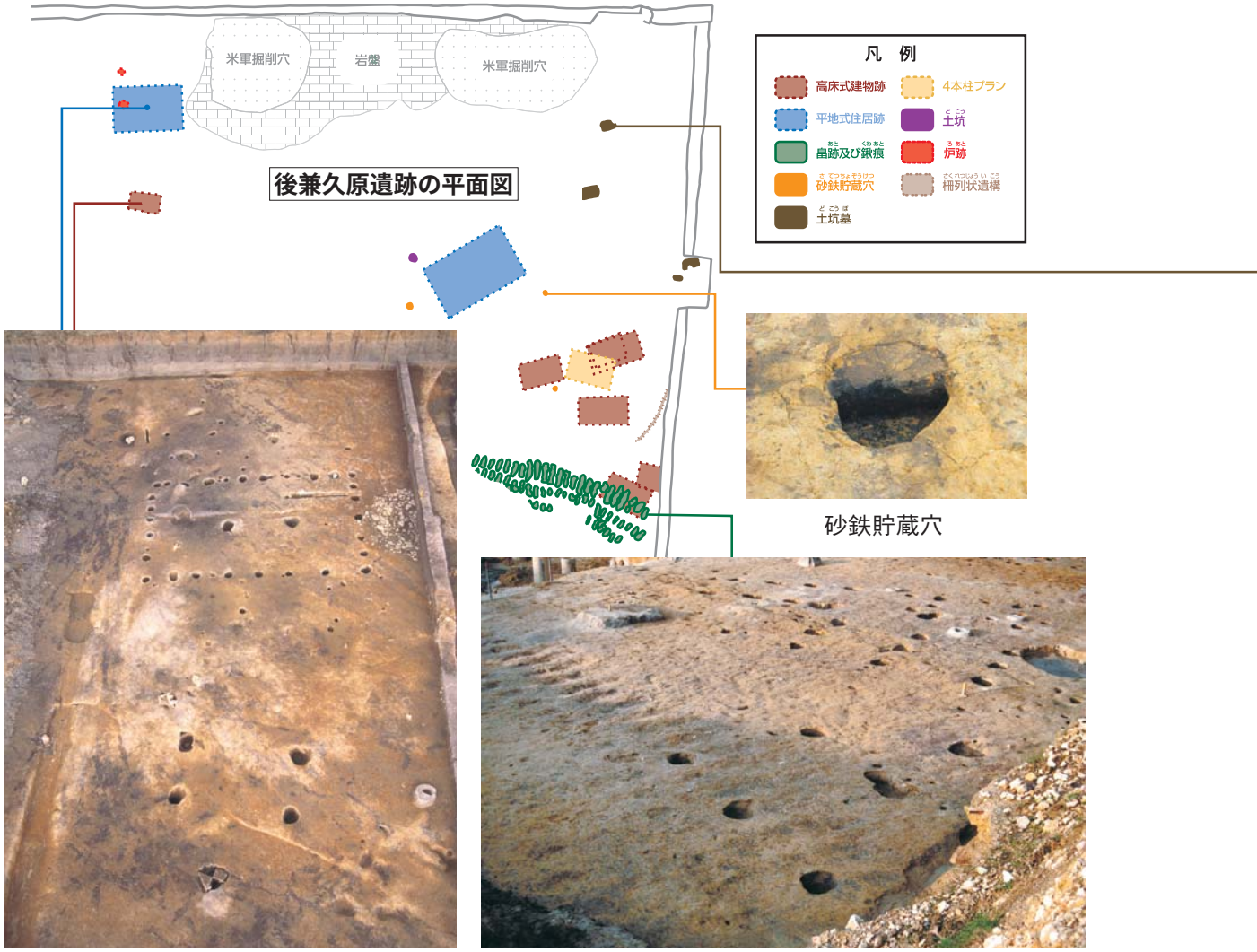
後兼久原遺跡（11世紀後半～近世　北谷町字桑江）

後兼久原遺跡は、北谷町役場新庁舎建設に先立ち、1996～1997年に発掘調査が行われた。調査の結果、11世紀～13世紀を中心とする集落遺跡であることがわかった。

グスク時代の集落

遺跡からは平地式や高床式の建物の他、畠跡や土坑墓が見つかったことから、当時の集落の空間構成を知ることができる重要な遺跡であることがわかった。また砂鉄を大量に埋めた穴は、製鉄を行っていた可能性を示唆している。一般的にグスク時代の沖縄では、中国から輸入した鉄鍋をリサイクルして新たな鉄製品を作り出していたか、鉄製品そのものを輸入していたと考えられている。もし穴に埋められていた砂鉄から鉄を生み出していたとすれば、沖縄の鉄の歴史を解明する手がかりとなる。

さらに14世紀前半の土層から豚と見られる骨が発見された。これまでは14世紀後半に中国から持ち込まれたのが最初と考えられていたが、もっと早い時期に持ち込まれていたことがわかった。



砂鉄貯蔵穴

平地式（奥）と高床式の建物跡

畠跡

土坑墓

渡地村跡（14世紀～近代　那覇市通堂町1丁目）

渡地村跡は那覇港の岸壁近くに広がる遺跡である。道路整備に伴い、2006～2007年度にかけて沖縄県立埋蔵文化財センターと那覇市教育委員会が発掘調査を行なった。調査の結果、当時のにぎやかな港町を物語る護岸の跡や、大量の輸入陶磁器などが発見された。

大量の青磁

渡地とは、通堂町にかつてあった小島で、山原船や馬艦船が多く停泊していた。近くには御物城や硫黄城など交易物資を保管する場所があり、港町として栄えた。島には護岸のための石積みが設けられ、対岸（現在の東町方面）の陸とは橋で結ばれていた。また鉄製品を製造するための鍛冶炉や鍛冶関連遺物が見つかったことから、工房があったこともわかった。

出土品の中で最も量が多かったのが、中国産の青磁である。これは渡地村跡に住んでいた人達が使っていた物も含まれてはいるが、大部分は各地に運ばれる予定の物であったと考えられる。

青磁以外にもタカラガイが集中して見つかった場所があった。このタカラガイについては色や大きさがそろっているという特徴があるが、何に使ったのかは不明である。

またヤコウガイで作った貝匙や、貝匙を作った後にのこった貝殻も見つかったことから、ヤコウガイの加工も行っていたことがわかった。

遺跡の近景（平成18年度）

遺跡の近景（平成19年度）

大量に出土した青磁

タカラガイの出土状況

崎山御嶽遺跡（14～15世紀頃　那覇市首里崎山町）

崎山御嶽遺跡は首里城の南側に接する場所にある。『琉球国由来記』によると、この遺跡は崎山里主の屋敷跡だったと記されている。また遺跡内にある彼の墓と言われる拝所は、琉球王国時代に首里大阿母志良礼が仕えた御嶽の１つであったことが記されている。

遺跡がある場所を公園として整備する前に発掘調査が行われた結果、当時存在していた建物の屋根に葺かれていたと考えられる大量の瓦が発見された。

大量の屋根瓦

瓦の大部分が、灰色をした「大和系瓦」と呼ばれる物であった。沖縄で最初に葺かれた瓦は「高麗系瓦」で、その時期は12世紀後半～14世紀末と諸説があり、いまだに確定していない。そのつぎに登場するのが大和系瓦である。

大和系瓦の特徴は唐草文の軒平瓦や三つ巴文の軒丸瓦、一枚造りの平瓦などにある。日本で造られていた瓦に文様や製作技法が似ていることから大和系瓦と呼ばれるようになった。

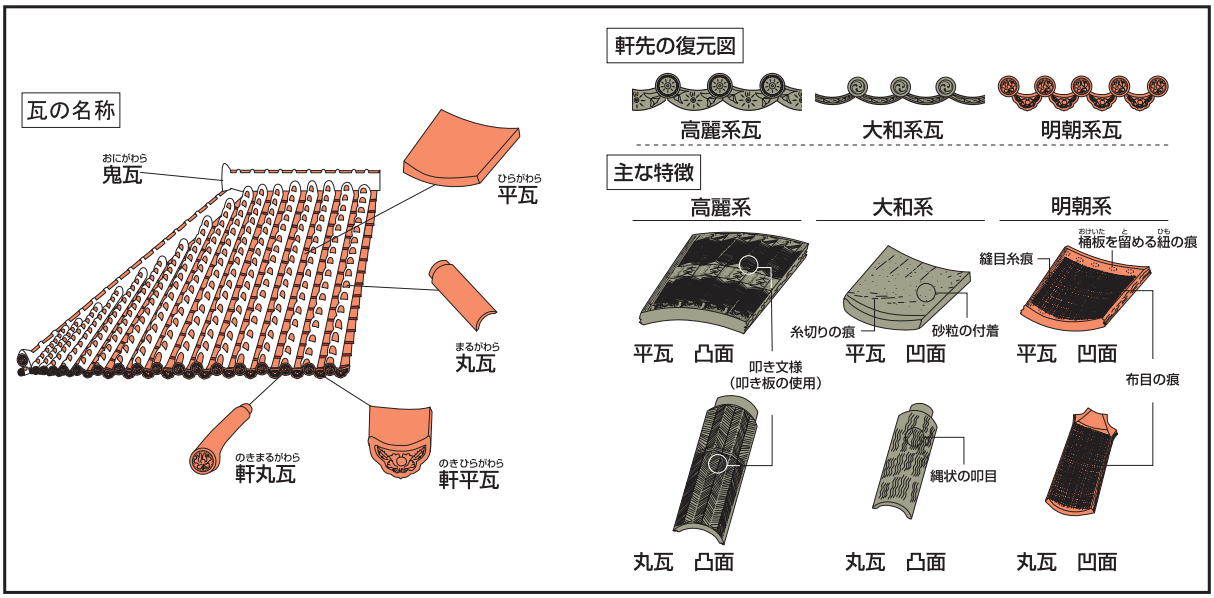
大和系瓦は首里城を初めごく一部の古いグスクからだけ出土するという特徴があり、今回のように大量に出土した例は初めてであった。まだまだ不明な部分が多い沖縄の瓦の歴史を解明する重要な発見となった。

発掘現場の様子

瓦の出土状況

軒丸瓦

おにがわら
鬼瓦



沖縄で出土する瓦の特徴

5　近世・近代

喜名古窯跡（17世紀～18世紀頃　読谷村字喜名）

喜名古窯跡は、標高70mで緩やかに南に傾斜する場所で発見された。2003年に村道工事にともなって事前に行われた発掘調査によって、３基の窯跡と、失敗品を捨てた物原が発見された。

文献に登場しない窯

喜名焼古窯跡について記した文献は見つかっていない。「康熙九年」と刻まれた厨子甕があることから、1671年前後に操業していたことはわかっているが詳細は不明であった。

今回の調査で見つかった３基の窯跡は、東から３号・１号・２号と名前がつけられた。いずれも床面は14度前後の傾斜があり、焚き口は南西方向を向いている。

１号窯跡は粘土を貼ってアーチ状に造った天井部が残っており、床面からの高さは1.1mである。胴から床までは地山を掘り込んで造った半地下式の窯である。窯の内部には喜名焼片がびっしり詰められていた。

３基の窯をはさむように、２基の物原が発見された。物原に捨てられた喜名焼陶片は厚いところで１mに達していた。

現在１号窯については見学できるように小屋が建てられ、その他は埋め戻されている。

発掘現場の様子（東から）

1号窯跡（南西から）

出土した喜名焼

窯道具（左からハマ、馬の爪（つめ））と炉壁（ろへき）

神応寺跡（16世紀後半～20世紀頃　那覇市字繁多川）

神応寺は、琉球八社の一つである識名宮を庇護する寺院である。創建年代は不明であるが、識名宮との関係から、16世紀後半頃以降と考えられている。創建当初は臨済宗であったが、1671年に真言宗に改宗している。

発掘調査は、公民館・図書館建設工事にともなうもので、2002年度に行われた。調査の結果、基盤の琉球石灰岩を削って平場を造り、その上に各建物が造られたことがわかった。

さまざまな仏具

発掘調査の結果、寺院で使われた様々な仏具が出土した。歓喜天は青銅製で、高さ16.4㎝、重量900gである。本来インド古代神話のシヴァ神の子ガネーシャであるが、仏教に組み込まれ信仰の対象となった。象頭人身で男天と天蓋のある天女が互いに右肩に顔をのせて抱き合っている。日本では障害を除き福を受ける神として、また夫婦和合、子宝、安産の神として信仰を集めた。

発掘現場の様子

門の跡

埋め甕

石組み遺構

歓喜天（かんぎてん）

青銅製の仏具

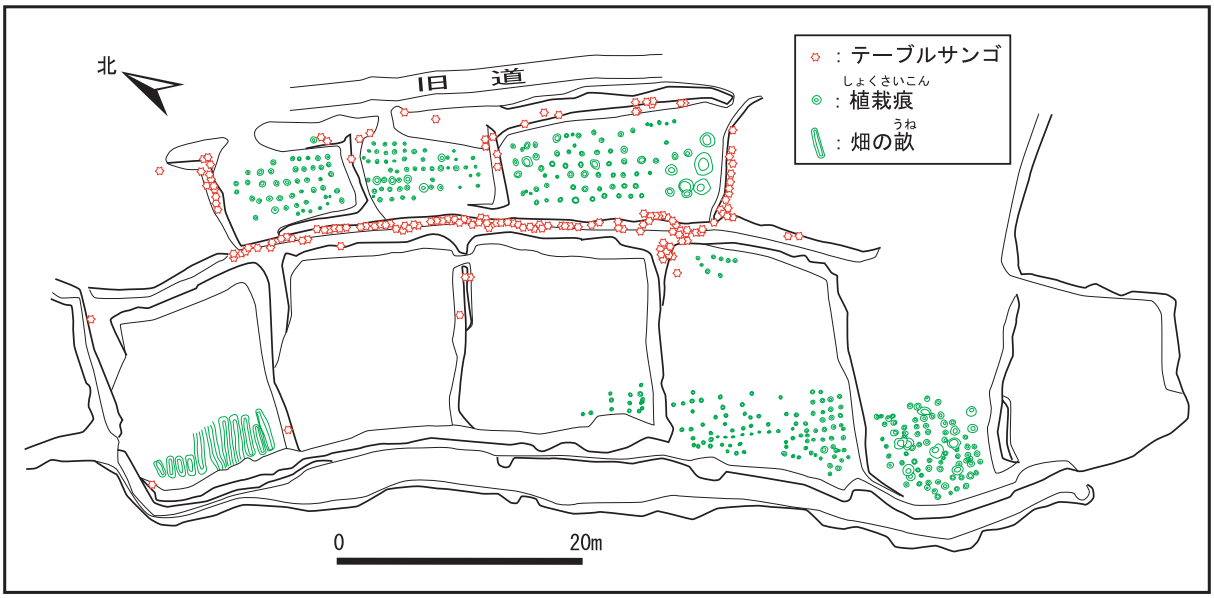
大袋原の猪垣（近世～近代　恩納村字恩納）

大袋原の猪垣は、恩納村のほぼ中央の山中で発見された。この場所には沖縄科学技術大学院大学が建設される予定で、2004年度から事前の発掘調査が行われている。2006年度に行われた調査の結果、炭焼き窯や猪垣など近世～近代の遺構が見つかった。

テーブル珊瑚を利用した猪垣

猪垣は石を高く積んで壁を作る場合と、今回のように土手の上にテーブル珊瑚を並べる場合がある。近くの海から持ってきたテーブル珊瑚を土手の上に並べ、その上から土をかぶせている。猪垣に囲まれた場所から、規則的に並んだ多数の穴が見つかったことから、作物を育てていたことがわかる。

大袋原の猪垣の位置



大袋原の猪垣の平面図

猪垣に守られた畑跡

猪垣

猪の目線で見た猪垣

6　宮古・八重山

アラフ遺跡（先史時代無土器期　2900～800年前頃　宮古島市城辺）

アラフ遺跡は宮古島東側の海岸近くにある遺跡である。アラフ遺跡発掘調査団が2000年～2006年にかけて８次にわたる調査を行った。調査の結果、サンゴ石灰岩の集石や貝斧など、宮古・八重山諸島に特徴的な資料が確認された。

貝斧に込められた思い

2003年の第６次調査において、４点の貝斧が１か所に集められた状態で発見された。またこれらの貝斧の間には、枝珊瑚が１点添えられていた。

貝斧はそれぞれ形や大きさが異なることから、用途に合わせて使い分けたと考えられる。また貝斧の刃部には、刃こぼれや研磨の跡が見られることから、斧として使用していたようである。

海岸に打ち上げられた枝珊瑚は表面が削られて丸みを帯びているが、貝斧に添えられていた枝珊瑚には特有の細かい突起が残っていることから、新鮮な枝珊瑚を折り取って添えたことが考えられる。

なぜ貝斧を１か所に集めて枝珊瑚と一緒に置いたのかは今のところわかっていない。しかしそこには貝斧に込められた先人達の思いがあるはずである。

アラフ遺跡の遠景

集石遺構（左）と貝斧の集積（右）

貝斧の集積　出土状況

貝斧の集積　貝斧と枝珊瑚

アラフ遺跡の出土品

第２章　文化財の保存・活用

１　修復された考古資料

首里城跡京の内地区出土の陶磁器（14世紀中頃～15世紀中頃　那覇市首里当蔵町）

首里城跡の発掘調査は、主に公園整備に伴う事前の調査として1985年から現在まで行われている。1994・1995年に調査された京の内地区の発掘調査では、1459年に発生した倉庫の火災で焼けてしまったと考えられる大量の陶磁器が発見された。陶磁器は一括性が高く、また世界的にも貴重な紅釉水注や染付合子などを含むことから、金属製品やガラス製品とともに2000年に重要文化財に指定された。

現在沖縄県立埋蔵文化財センターでは、京の内出土考古資料の保存修理事業を行っている。陶磁器の場合、接合や石膏復元した資料を解体・クリーニングし、必要に応じて樹脂をしみ込ませて強化処理を行う。つぎに接合を行い、破片が足りない部分にはエポキシ系樹脂（アラルダイト）を補填する。最後にアクリル系絵の具で色や文様を加えて完成となる。石膏に比べてエポキシ系樹脂の方が軽くて丈夫であるという利点がある。

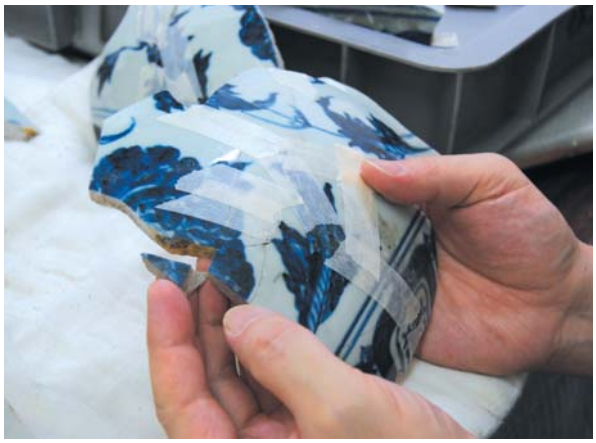
京の内地区発掘現場の遠景

大量の陶磁器が出土した倉庫跡

京の内地区出土の陶磁器

解体

クリーニング



接合

樹脂の補填

彩色

斎場御嶽の出土品（14世紀後半～16世紀後半　南城市知念）

斎場御嶽には「大庫裏」「寄満」など６つの拝所があり、それぞれが石畳の参道で結ばれている。琉球王国時代には王国の安泰を祈願する場所であり、国王が知念半島の御嶽を巡る「東御廻り」の拝所の１つであった。また琉球王国で最高位の神女である聞得王君の就任式「御新下り」も執り行われた。

斎場御嶽は琉球王国を精神面から支える国家的な祭祀の場として重要であり、現在も信仰の対象となっている。

1994年から史跡整備にともなう発掘調査が行われ、「三庫裏」の基壇の下から青磁の碗や皿10点、勾玉９点、銭貨534点、金製の厭勝銭９点がまとまって見つかった。これらは当時行われた祭祀の形態を示す重要な資料として、2001年に重要文化財に指定された。

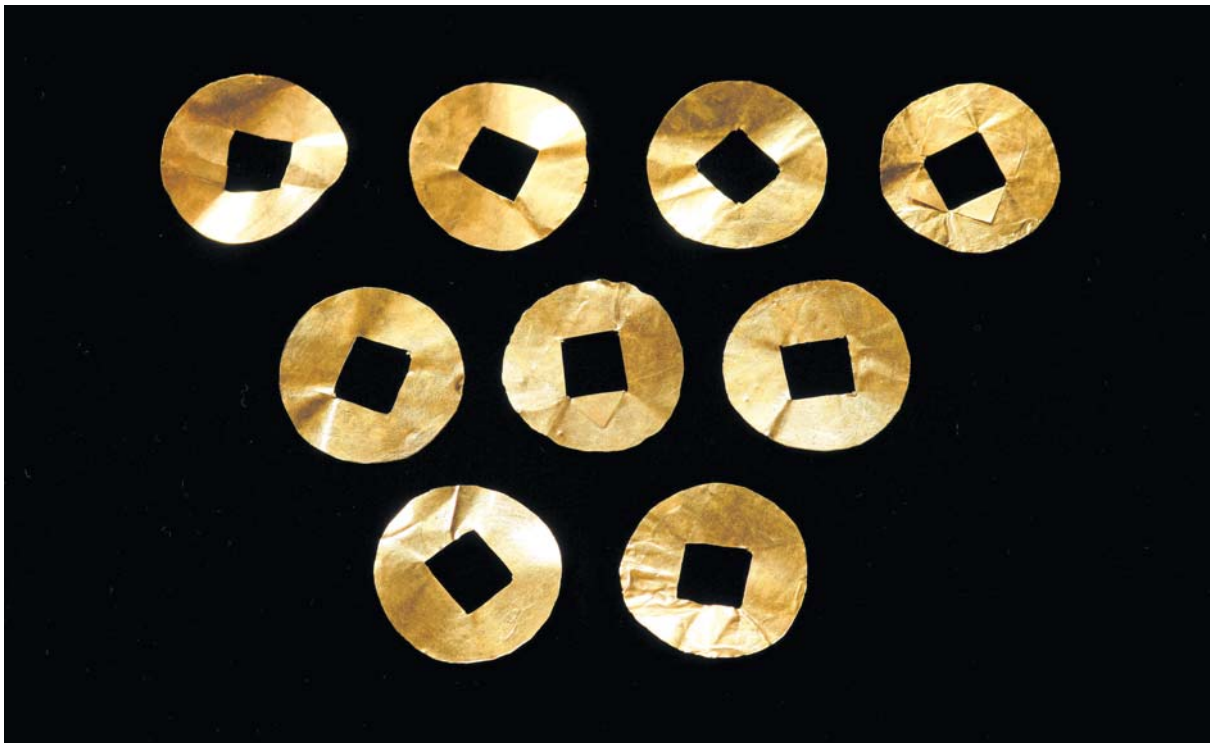
南城市教育委員会はこれらの資料について脱塩処理や防錆処理、クリーニング等を行う事業を継続中である。

発掘作業の様子

三庫裏

遺物の出土状況

三庫裏の出土品



修復作業を終えた金製の厭勝銭

修復作業を終えた勾玉

2　国から指定された史跡

「史跡」とは、日本国内にある遺跡の中で特に重要であると国が認定した遺跡のことである。史跡として指定する場合、遺跡がある土地の地籍調書や土地所有者からとる同意書、各種図面、写真などをとりまとめて文部科学省に申請を行う。

史跡に指定された遺跡においては、遺跡保護のため建物の建設や土木工事などが制限される。また史跡整備を進めるための土地購入費やさまざまな事業費について、国の補助が得られるようになる。

下田原城跡（15・16世紀頃か　竹富町字波照間）

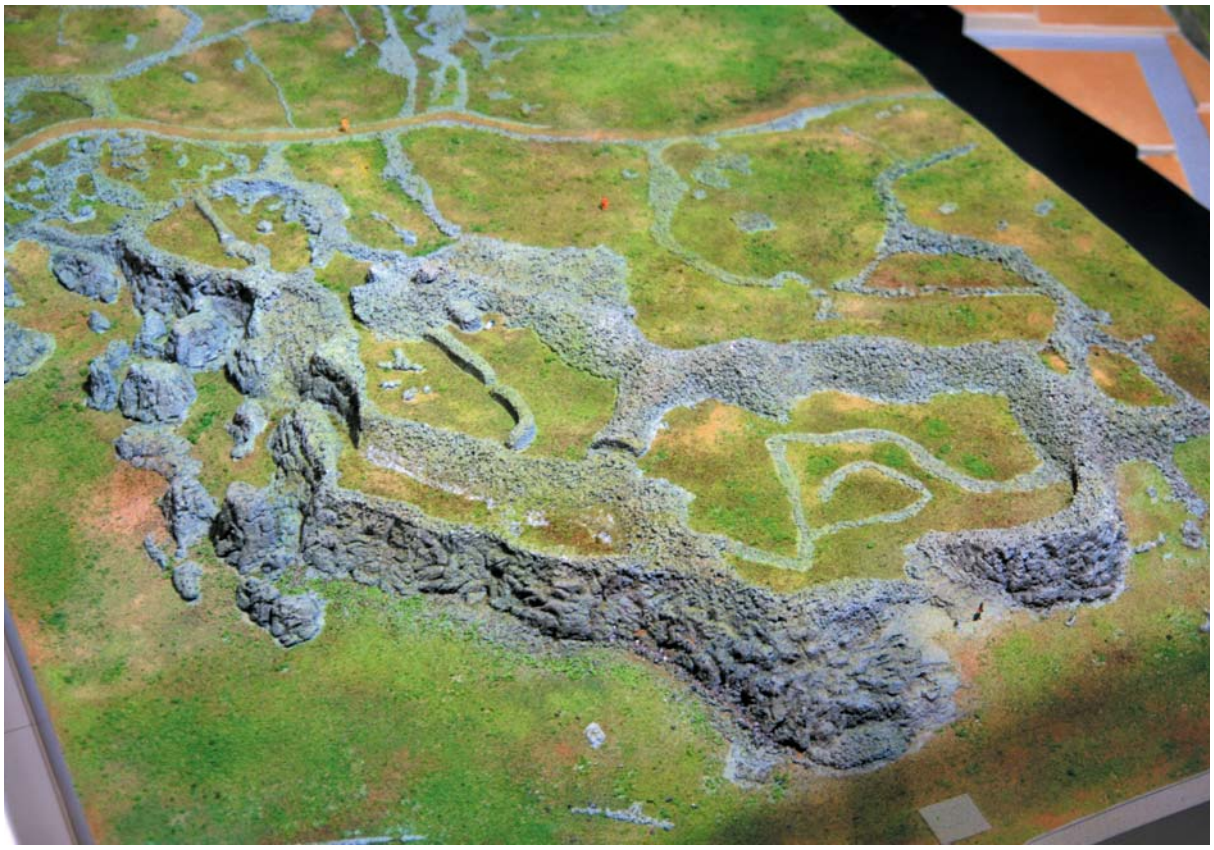
下田原城跡は波照間島の北側にある遺跡で、緩斜面上に石積みで囲まれた区画がいくつも連結した構造を持つ。北側は石灰岩の急な崖となっている。石積みは東西200m、南北150mの範囲に及び、高さ３mを超える場所もある。また各区画をつなぐ門や物見台、井戸などの遺構がよく残っている。

発掘調査は行われていないが、表面採集された遺物から15～16世紀頃に機能していたと考えられている。この時期は琉球王国が八重山地方に統治の手を伸ばし、これに対し八重山各地の首長が多様な多様な行動をとった。とくに1500年にはオヤケアカハチが琉球王国に反旗をひるがえし、激戦を繰り広げた結果、敗れた。これによって奄美から八重山に及ぶ琉球王国が統一された。

下田原城跡は琉球が統一国家を形成するという歴史上重要な時期の様相を明らかにする上で重要な遺跡であることから、2003年に46,789㎡が史跡に指定された。

物見台

区画をつなぐ門の跡



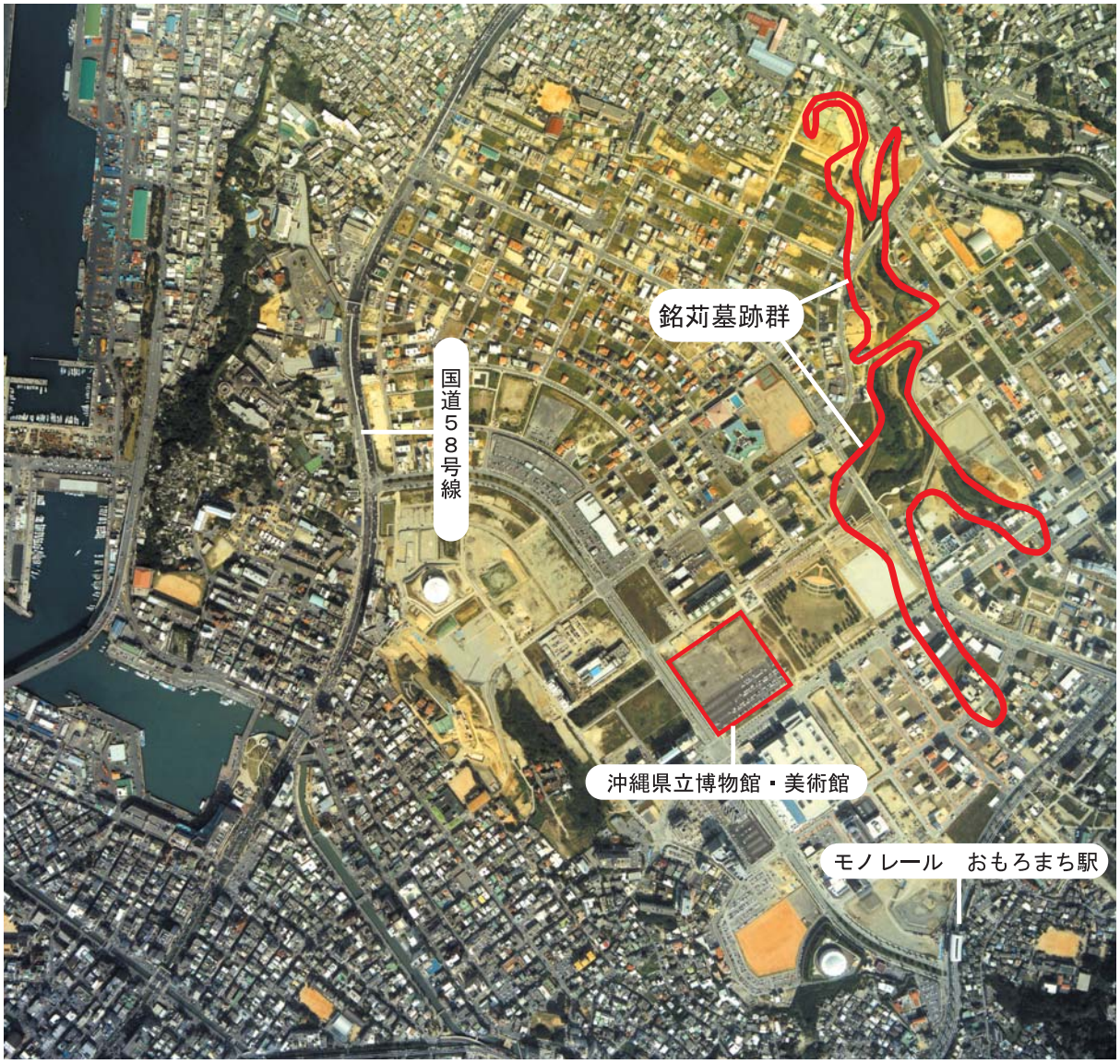
下田原城跡の模型（もけい）

銘苅墓跡群（15世紀～20世紀　那覇市銘苅）

銘苅墓跡群は15世紀以降に営まれた墓地で、10万㎡以上の範囲が調査された。墓地は大きく南側（銘苅川・大湾川流域）と北側（多和田川流域）に分かれ、川岸の琉球石灰岩崖下に造られた岩陰墓、掘込墓、亀甲墓などが335基確認された。これらの中には、36体の風葬人骨があった岩陰墓や、県内最大規模の亀甲墓もあった。

墓の中には、遺骨を納めるため石製・陶器製の厨子甕があり、簪・指輪・煙管・食器・花瓶などの副葬品があった。厨子甕には銘書（亡くなった人の名前・死亡年月日・家族関係など）が記されており、調査の結果、銘苅墓跡群は首里系・那覇系士族の墓だとわかった。また死亡年月日から厨子甕の制作年代が判明し、銘書と家譜（家系図）が一致するなど、考古学と文献史学とが共同で成果を上げた。

このような重要性が考慮された結果、岩陰墓２基、掘込墓28基、亀甲墓２基の合計34基、約5000㎡が2007年に史跡に指定された。



銘苅墓跡群の位置

岩陰墓の墓室内の様子

堀込墓の墓室内の様子

厨子甕①

厨子甕②

厨子甕③

花生け

猪口（ちょこ）

対瓶（ついびん）

瓦証文

国頭方西海道（グスク時代～現代　15世紀～20世紀　恩納村字仲泊、真栄田、山田）

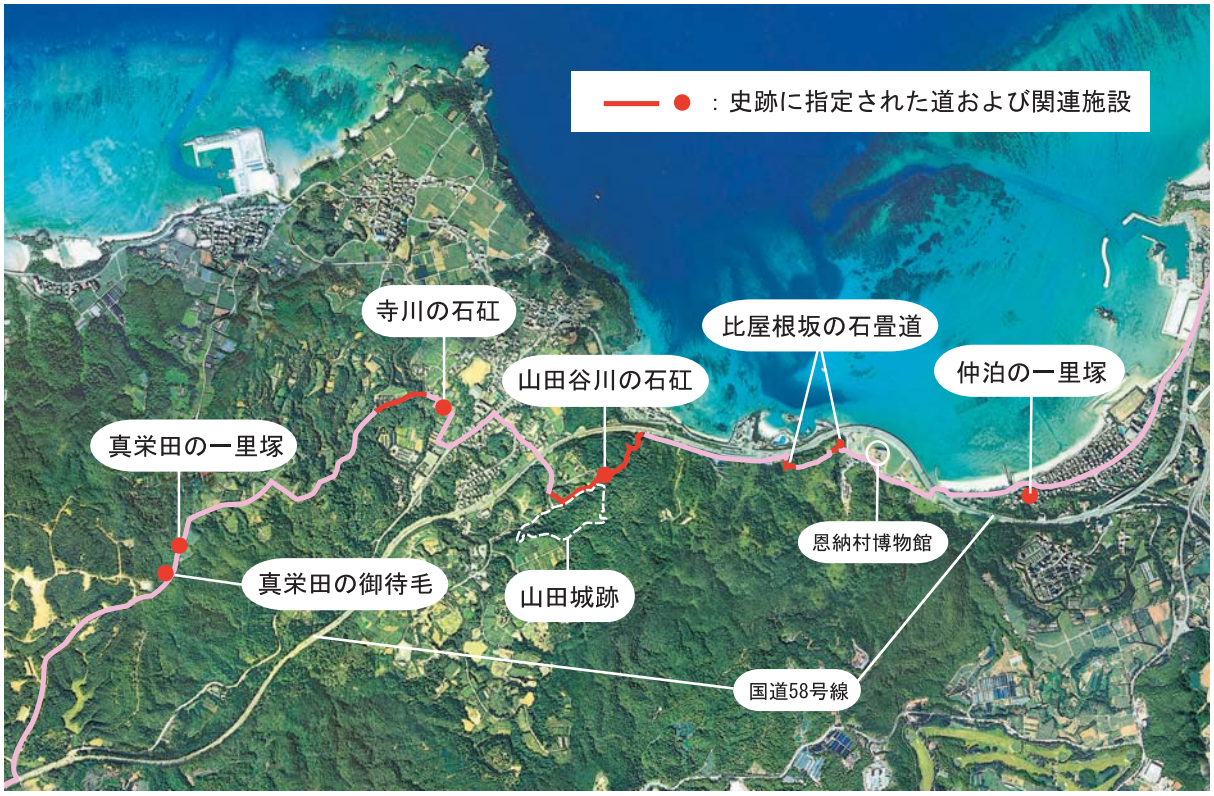
国頭方西海道は琉球王国時代に整備された主要道「宿道」の一つで、現在の読谷村～国頭村に伸びる道である。道幅は約2.4mで、道沿いには一里塚や石矼などの関連施設が点在する。

石矼は、川にかけられた石造りの橋で、山田谷川の石矼と寺川矼の２か所がある。

一里塚とは、一里（約3.9km）ごとに設置された距離の目安で、土を盛ったり自然の丘（琉球石灰岩）を利用して塚とした。かつて恩納村には５か所に一里塚があったが、現在は仲泊と真栄田の２か所が残っている。

御待毛は、国王や上級役人が地方を巡検した時、道沿いの村人が歓迎するための広場である。

このように琉球王国時代の主要道が関連施設とともに良好に残っていることは、交通の歴史を考える上でも重要である。そこで2004年に、約1kmの道とその途中にある関連施設を合わせた約4300㎡が史跡に指定された。



国頭方西海道

真栄田の一里塚

真栄田の御待毛

恩納村字山田の国頭方西海道

仲泊の一里塚

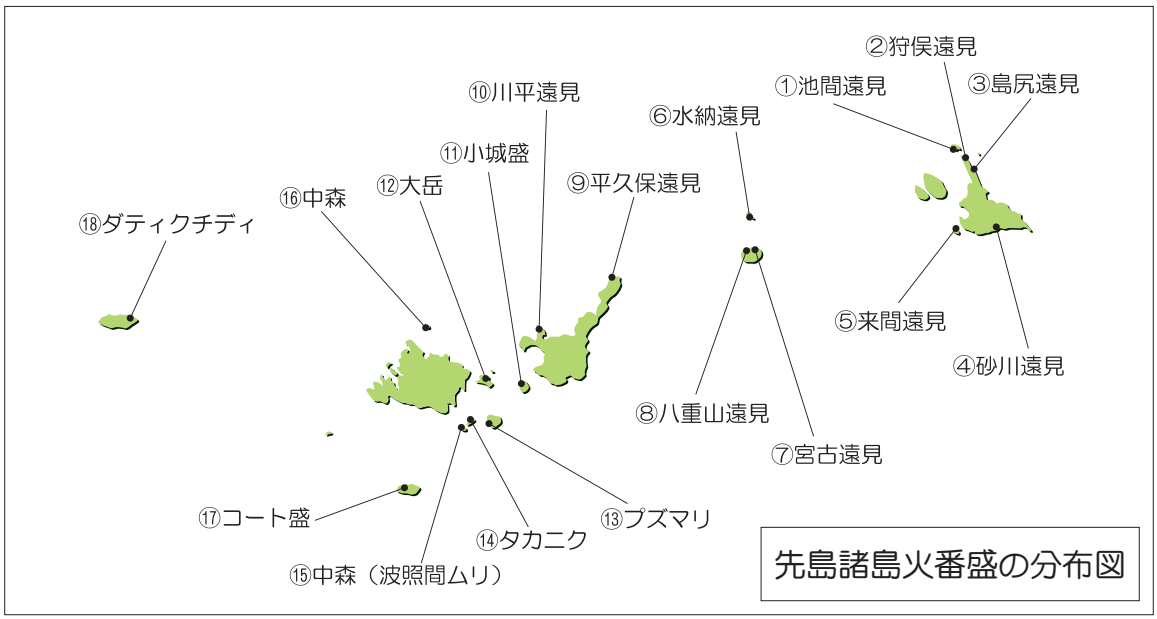
山田谷川の石矼

比屋根坂石畳道（ひやごんびらいしだたみみち）

先島諸島火番盛（さきしましょとうひばんむい）（17世紀中頃～近代　宮古島市５件、多良間村３件、石垣市２件、竹富町７件、与那国島１件　合計18件）

先島諸島火番盛は、1644年に琉球王府によって設置された監視所群（かんしじょぐん）である。火番盛とは火を焚（た）く丘という意味を持ち、烽火（のろし）をあげて情報伝達を行っていた。また遠見番所（とおみばんしょ）とも呼ばれ、1638年に徳川幕府が長崎に設置したのが最初である。火番盛は見晴らしのいい高台に設置され、石を積んでより高くする場合が多い。

琉球列島の最西端に位置し、当時の対外関係と鎖国（さこく）体制の完成を示す遺跡として重要であることから、2007年に国の史跡に指定された。



先島諸島火番盛の分布図

①池間（いけま）遠見

②狩俣（かりまた）遠見

③島尻（しまじり）遠見

④砂川遠見

⑤来間（くりま）遠見

⑥水納（みんな）遠見

⑦宮古遠見

⑧八重山遠見

⑨平久保遠見台

⑩川平（かびら）火番盛

⑪小城（くすくむい）盛

⑫大岳（うふだけ）

⑬プズマリ

⑭タカニク

⑮中森（波照間森）

⑯中森

⑰コート盛

⑱ダティクチディ

山田城跡（14世紀～15世紀頃　グスク時代　恩納村字山田）

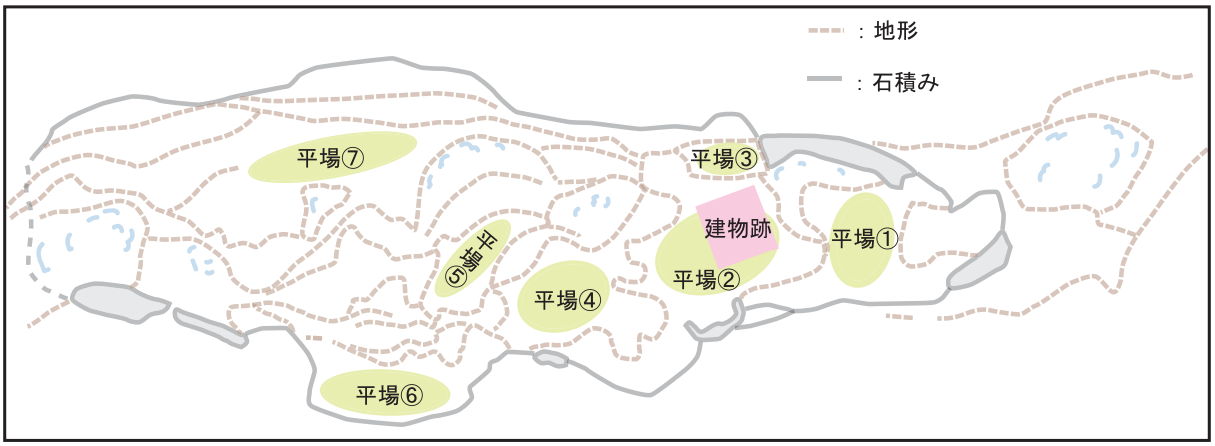
山田城跡は、標高約90mの琉球石灰岩台地上に築かれた城である。この城は周辺地域を治めていた按司代々の居城で、最後に居たのが護佐丸であった。

護佐丸は1416年尚巴志の北山討伐に参戦し北山を滅ぼした。そのあと座喜味城を築き、城を移した。その際、山田城の石垣を取り壊して座喜味城を築いたといわれている。

1986～1988年にかけて発掘調査が行われた結果、７か所の平場、10.8×3.5mの建物跡、城壁の基礎部分が確認された。城の規模は東西約30m、南北約160mである。また中国産陶磁器、銭貨、刀子、鉄鏃、玉などが出土した。

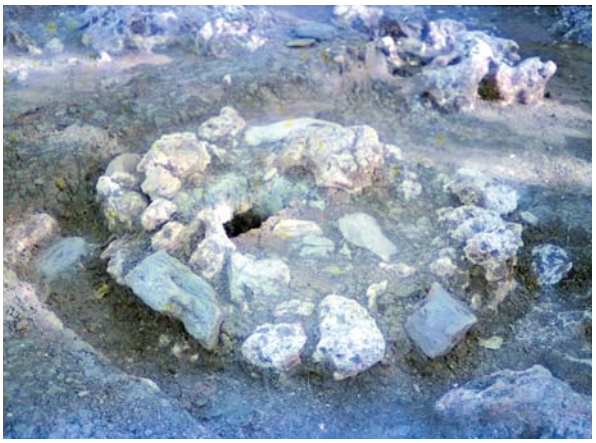
山田城跡の遺構は残りが良く、三山時代から琉球王国成立期までの歴史を知る重要な遺跡であることから、2008年に国の史跡に指定された。

山田城跡の位置



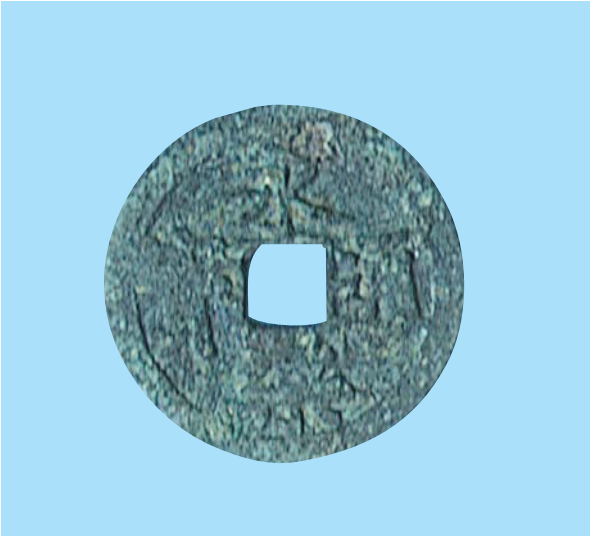
山田城跡の平面図

遺構の検出状況

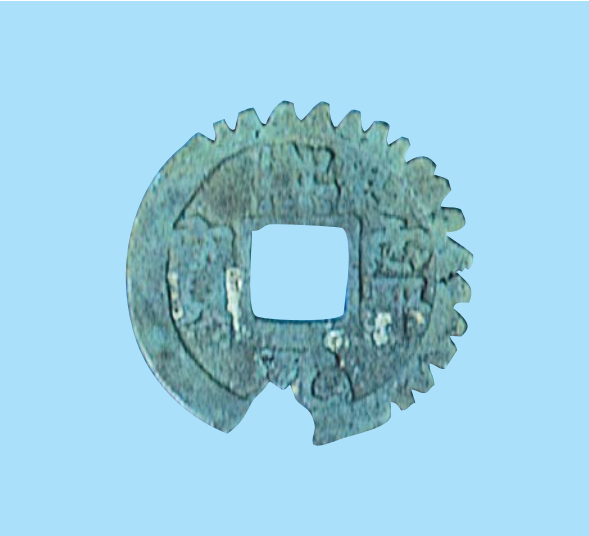


柱の根固め石

中国産の白磁（中央）と青磁



銭貨「永楽通寶（えいらくつうほう）」



加工された銭貨

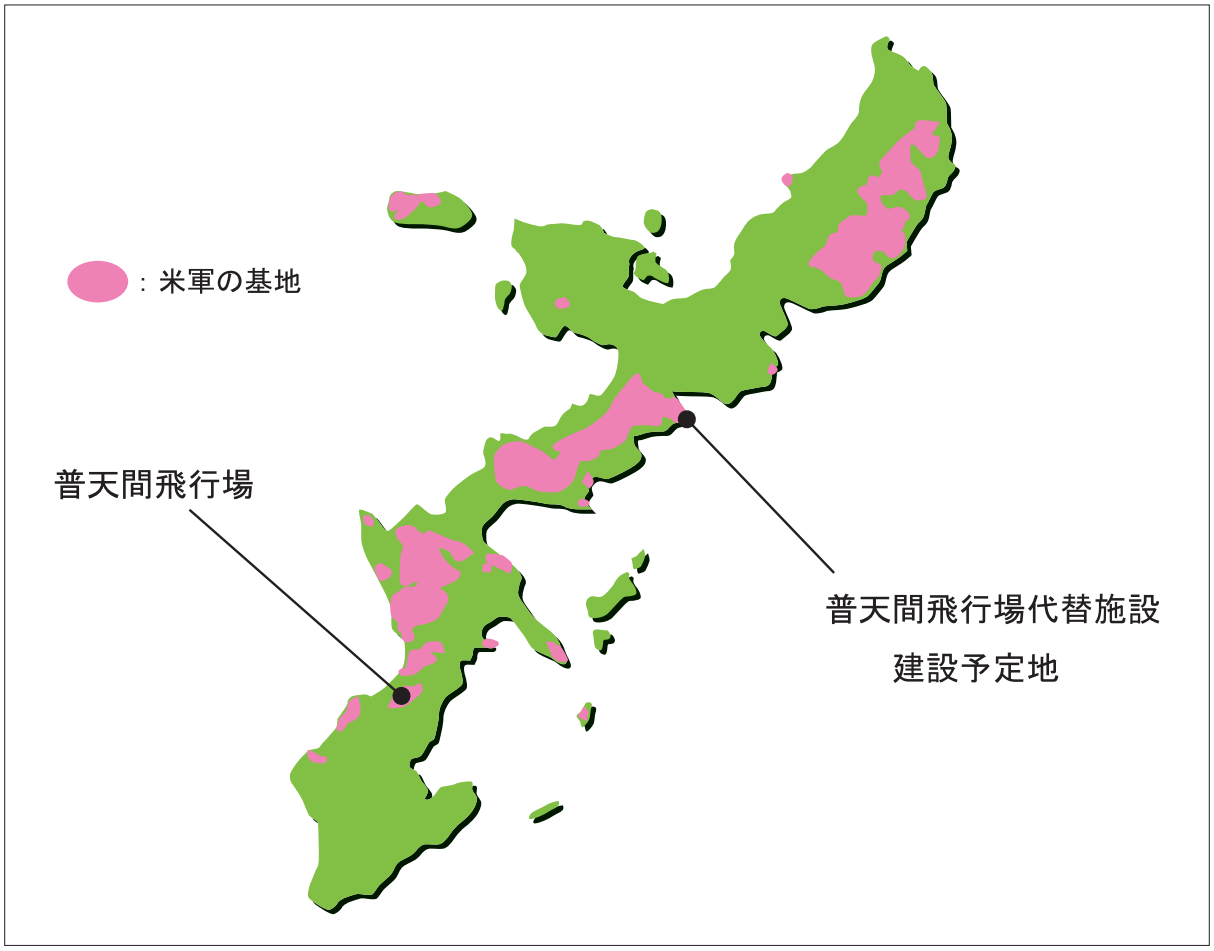
第３章　文化財保護行政の現状

１　米軍基地内の発掘調査

沖縄県内には米軍の基地が多数存在する。基地内にも文化財が数多く存在することが知られており、現在も分布調査が継続して行われている。特に返還予定の普天間基地（宜野湾市）では、返還後のさまざまな開発をスムーズに行うために、文化財の有無や範囲を調べる分布調査を行っている。この分布調査には、表面踏査と試掘調査がある。

表面踏査とは、墓など地上にある構築物や地面に落ちている陶磁器などの遺物を探して遺跡の有無を予測する調査である。試掘調査とは、狭い範囲を掘って、遺跡の有無や範囲を確認する調査である。普天間基地の試掘調査では、４ｍもしくは２ｍ四方の範囲を、30m間隔で掘ることが多い。掘り終わったら写真や図面で記録し、その日で埋め戻しを行うことが原則となっている。普天間基地内の分布調査は1999年度から継続中で、沖縄県と宜野湾市が共同で行っている。試掘調査の計画は5100か所で、2008年４月の段階で1700か所の試掘を終えた。しかし基地は現在も使用中であるため、滑走路や建物がある場所は試掘できていない。

また普天間基地返還後の代替施設が建設予定の名護市でも、事前の分布調査が行われている。



沖縄島にある米軍基地

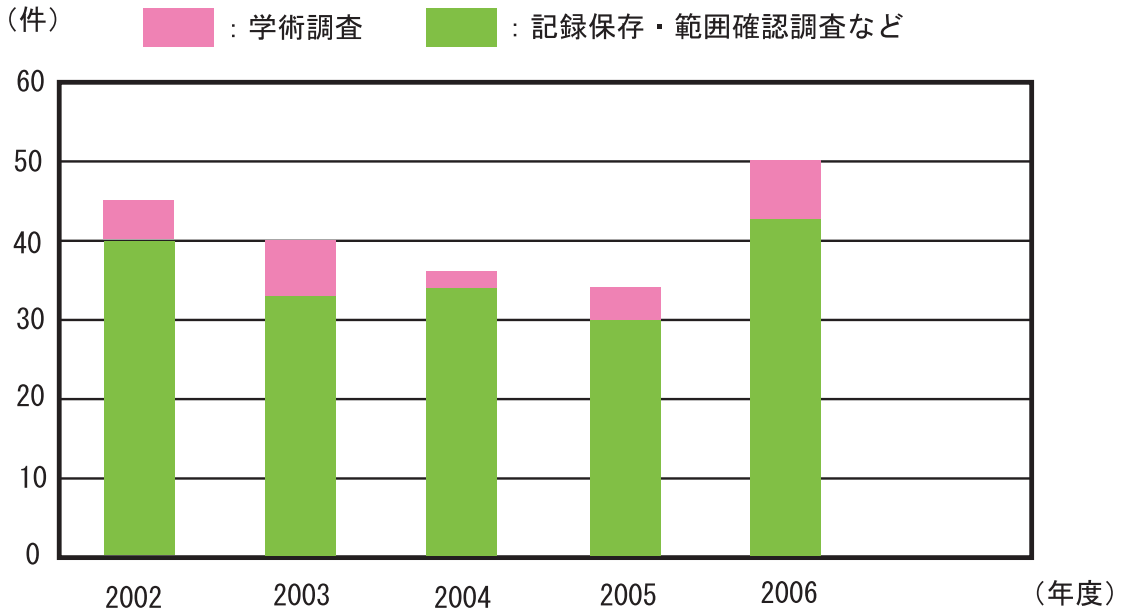
2　発掘調査の件数・体制・方法

沖縄県では年間40件前後の発掘調査が行われている。その大半を占めるのは、開発工事に先立って行われる発掘調査である。このような調査の場合、図面や写真、出土品等の資料を整理して報告書を刊行した後、遺跡自体は消滅する場合がほとんどである。

発掘調査には多額の費用と時間、人手が必要である。それと同じくらいの手間暇がかかるのが、資料整理作業である。通常これらの作業は県や市町村といった自治体が行ってきたが近年では、民間企業が請け負うケースが増えてきた。

また10年ほど前から、発掘調査で使用する測量機械やカメラなどの機材がデジタル化してきており、最近ではフィルムカメラを使用する割合がかなり少なくなってきた。資料整理の中で図面を製図する場合も、これまでは専用のペンを使って手書きしていたが、最近は図面をスキャンしてパソコで行うようになった。

今後も民間企業の進出や、デジタル機器の進歩がさらに進むと考えられるので、作業の効率化と調査精度向上のバランスを図っていく必要がある。



発掘調査の件数

図版目録

ページ	名　称	提　供
2･3	年表	沖縄県立博物館・美術館
4	出品遺跡の分布図	沖縄県立博物館・美術館
5	南城市武芸洞の調査	沖縄県立博物館・美術館
5	武芸洞での見学会	沖縄県立博物館・美術館
5	武芸洞で発見された縄文時代晩期頃の埋葬人骨	沖縄県立博物館・美術館
6	伊礼原遺跡の位置	北谷町教育委員会
7	ウーチヌカー	北谷町教育委員会
7	砂丘区の遠景	北谷町教育委員会
7	低湿地区の遠景	北谷町教育委員会
7	竪穴式住居跡	北谷町教育委員会
7	地形変遷図	北谷町教育委員会
8	伊礼原遺跡の土層	北谷町教育委員会
8	フェンサ下層式土器	北谷町教育委員会
8	大当原式土器	北谷町教育委員会
8	縄文晩期土器	北谷町教育委員会
8	荻堂式土器	北谷町教育委員会
8	面縄前庭式土器	北谷町教育委員会
8	面縄東洞式土器	北谷町教育委員会
8	曽畑式土器	北谷町教育委員会
8	室川下層式土器	北谷町教育委員会
8	爪形文土器	北谷町教育委員会
9	石器	北谷町教育委員会
9	骨製品	北谷町教育委員会
9	翡翠製品	北谷町教育委員会
9	貝輪	北谷町教育委員会
9	笊	北谷町教育委員会
9	木の実	北谷町教育委員会
9	櫛	北谷町教育委員会
9	石斧の柄	北谷町教育委員会
9	木製容器	北谷町教育委員会
10	遺跡の遠景	名護市教育委員会
10	現地説明会の様子	名護市教育委員会
10	発掘調査の様子	名護市教育委員会
10	イモガイの集積（弥生時代並行期）	名護市教育委員会
10	古墳時代並行期の土器	名護市教育委員会
10	弥生時代並行期の人骨	名護市教育委員会
11	1号・2号人骨の出土状況	名護市教育委員会
11	1号人骨	名護市教育委員会
11	2号人骨	名護市教育委員会
11	縄文時代の出土品	名護市教育委員会
12	遺跡の遠景	糸満市教育委員会、土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム
12	発掘調査の様子	糸満市教育委員会、土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム
12	遺跡の近景	糸満市教育委員会、土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム

ページ	名　称	提　供
12	貝製品の出土状況①	糸満市教育委員会、土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム
12	貝製品の出土状況②	糸満市教育委員会、土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム
12	人骨の検出状況	糸満市教育委員会、土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム
13	貝輪	糸満市教育委員会、土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム
13	めずらしい形の貝製品	糸満市教育委員会、土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム
13	線刻された貝製品	糸満市教育委員会、土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム
13	さまざまな貝製品、骨製品	糸満市教育委員会、土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム
14	浜屋原貝塚の遠景	読谷村教育委員会
15	ゴホウラの集積	読谷村教育委員会
15	漢式三翼鏃(左が浜屋原貝塚B地点出土、右が宇堅貝塚群出土)	沖縄県立博物館・美術館
16	アンチの上貝塚　遠景	沖縄県立博物館・美術館
16	発掘調査の様子	本部町教育委員会
16	石器の集積	本部町教育委員会
17	3号・4号イモガイ集積	本部町教育委員会
17	4号イモガイ集積のイモガイ	小学館（撮影は長田剛）
18	発掘調査の様子	うるま市教育委員会
18	イモガイの集積	うるま市教育委員会
18	土器の出土状況	うるま市教育委員会
19	いろいろな形の土器	沖縄県立博物館・美術館
19	土器の口縁部に描かれた文様	沖縄県立博物館・美術館
20	遺跡の近景	浦添市教育委員会
21	工房跡で見つかった金床石	浦添市教育委員会
21	坩堝	浦添市教育委員会
21	鞴の羽口	浦添市教育委員会
21	炉壁	浦添市教育委員会
21	鉄滓	浦添市教育委員会
21	鍛造剥片	浦添市教育委員会
21	粒状滓	浦添市教育委員会
21	菱形笠鋲	浦添市教育委員会
21	脚先金具	浦添市教育委員会
21	屋根に葺かれた瓦	浦添市教育委員会
21	復元整備された浦添ようどれ	浦添市教育委員会
22	後兼久原遺跡の平面図	北谷町教育委員会
22	平地式(奥)と高床式の建物跡	北谷町教育委員会
22	砂鉄貯蔵穴	北谷町教育委員会
22	畠跡	北谷町教育委員会
23	土坑墓	北谷町教育委員会
24	遺跡の近景（平成18年度）	那覇市教育委員会
24	遺跡の近景（平成19年度）	那覇市教育委員会
25	大量に出土した青磁	那覇市教育委員会
25	タカラガイの出土状況	那覇市教育委員会
26	発掘現場の様子	那覇市教育委員会
26	瓦の出土状況	那覇市教育委員会

ページ	名　称	提　供
26	軒丸瓦	沖縄県立博物館・美術館
27	鬼瓦	那覇市教育委員会
27	沖縄で出土する瓦の特徴	沖縄県立博物館・美術館
28	発掘調査の様子（東から）	読谷村教育委員会
29	1号窯跡（南西から）	読谷村教育委員会
29	出土した喜名焼	沖縄県立博物館・美術館
29	窯道具（左からハマ、馬の爪）と炉壁	沖縄県立博物館・美術館
30	発掘現場の様子	那覇市教育委員会
30	門の跡	那覇市教育委員会
30	埋め甕	那覇市教育委員会
30	石組み遺構	那覇市教育委員会
31	歓喜天	那覇市教育委員会
31	青銅製の仏具	那覇市教育委員会
32	大袋原の猪垣の位置	恩納村教育委員会
32	大袋原の猪垣の平面図	恩納村教育委員会
33	猪垣に守られた畑跡	恩納村教育委員会
33	猪垣	恩納村教育委員会
33	猪の目線で見た猪垣	恩納村教育委員会
34	アラフ遺跡の遠景	アラフ遺跡発掘調査団
34	集積遺構(左)と貝斧の集積(右)	アラフ遺跡発掘調査団
35	貝斧の集積　出土状況	アラフ遺跡発掘調査団
35	貝斧の集積　貝斧と枝珊瑚	沖縄県立博物館・美術館
35	アラフ遺跡の出土品	沖縄県立博物館・美術館
36	京の内地区発掘現場の遠景	沖縄県立埋蔵文化財センター
36	大量の陶磁器が出土した倉庫跡	沖縄県立埋蔵文化財センター
36	京の内地区出土の陶磁器	沖縄県立埋蔵文化財センター
37	解体	沖縄県立埋蔵文化財センター
37	クリーニング	沖縄県立埋蔵文化財センター
37	接合	沖縄県立埋蔵文化財センター
37	樹脂の補填	沖縄県立埋蔵文化財センター
37	彩色	沖縄県立埋蔵文化財センター
38	発掘作業の様子	南城市教育委員会
38	三庫裏	南城市教育委員会
38	遺物の出土状況	南城市教育委員会
38	三庫裏の出土品	南城市教育委員会
39	修復作業を終えた金製の厭勝銭	南城市教育委員会
39	修復作業を終えた勾玉	南城市教育委員会
40	物見台	竹富町教育委員会
41	区画をつなぐ門の跡	竹富町教育委員会
41	下田原城跡の模型	沖縄県立博物館・美術館
42	銘苅墓跡群の位置	那覇市教育委員会
43	岩陰墓の墓室内の様子	那覇市教育委員会
43	掘込墓の墓室内の様子	那覇市教育委員会

ページ	名　称	提　供
43	厨子甕①	那覇市立壺屋焼物博物館
43	厨子甕②	那覇市立壺屋焼物博物館
43	厨子甕③	那覇市立壺屋焼物博物館
43	花生け	那覇市立壺屋焼物博物館
43	猪口	那覇市立壺屋焼物博物館
43	対瓶	那覇市立壺屋焼物博物館
43	瓦証文	那覇市立壺屋焼物博物館
44	国頭方西海道	恩納村教育委員会
45	真栄田の一里塚	恩納村教育委員会
45	真栄田の御待毛	恩納村教育委員会
45	恩納村字山田の国頭方西海道	恩納村教育委員会
45	仲泊の一里塚	恩納村教育委員会
45	山田谷川の石砿	恩納村教育委員会
45	比屋根坂石畳道	恩納村教育委員会
46	先島諸島火番盛の分布図	沖縄県立博物館・美術館
46	①池間遠見	宮古島市教育委員会
46	②狩俣遠見	宮古島市教育委員会
46	③島尻遠見	宮古島市教育委員会
46	④砂川遠見	宮古島市教育委員会
46	⑤来間遠見	宮古島市教育委員会
46	⑥水納遠見	多良間村教育委員会
47	⑦宮古遠見	多良間村教育委員会
47	⑧八重山遠見	多良間村教育委員会
47	⑨平久保遠見台	石垣市教育委員会
47	⑩川平火番盛	石垣市教育委員会
47	⑪小城盛	竹富町教育委員会
47	⑫大岳	竹富町教育委員会
47	⑬プズマリ	竹富町教育委員会
47	⑭タカニク	竹富町教育委員会
47	⑮中森（波照間森）	竹富町教育委員会
47	⑯中森	竹富町教育委員会
47	⑰コート盛	竹富町教育委員会
47	⑱ダティクチディ	沖縄県立博物館・美術館
48	山田城跡の位置	恩納村教育委員会
48	山田城跡の平面図	恩納村教育委員会
49	遺構の検出状況	恩納村教育委員会
49	柱の根固め石	恩納村教育委員会
49	中国産の白磁（中央）と青磁	沖縄県立博物館・美術館
49	銭貨「永楽通寶」	沖縄県立博物館・美術館
49	加工された銭貨	沖縄県立博物館・美術館
50	沖縄島にある米軍基地	沖縄県立博物館・美術館
51	発掘調査の件数	沖縄県立博物館・美術館

参考・引用文献

アラフ遺跡発掘調査団　『アラフ遺跡調査研究Ⅰ―沖縄県宮古島アラフ遺跡発掘調査報告書―』2003年12月

浦添市教育委員会　『浦添ようどれⅡ　瓦溜まり遺構編』　2005年３月

浦添市教育委員会　『浦添ようどれⅢ　金属工房跡編』　2007年３月

江上幹幸「宮古島アラフ遺跡のシャコガイ製貝斧と利器－貝斧埋納遺構の考察を中心に－」『南島考古』№26　2007年３月

沖縄県教育庁文化課　『文化財行政要覧』平成15～19年度版　2003～2007年

恩納村教育委員会　『山田城跡　土に埋もれた歴史と文化』　1990年６月

恩納村教育委員会　『沖縄科学技術大学院大学（仮称）建設予定地内の遺跡』　2008年３月

沖縄県教育委員会　『首里城跡　京の内跡発掘調査発掘調査報告書（Ⅰ)』1998年

沖縄県立埋蔵文化財センター　『首里城京の内展』2001年

沖縄県立埋蔵文化財センター　『渡地村跡－臨港道路那覇１号線整備に伴う緊急発掘調査報告－』2007年７月

勝連町教育委員会　『津堅貝塚』　2005年３月

小学館　『考古資料大観』第12巻　貝塚後期文化　2004年

北谷町教育委員会　『後兼久原遺跡』　2003年３月

北谷町教育委員会　『伊礼原遺跡－図録集－』　2006年３月

北谷町教育委員会　『伊礼原遺跡』　2007年３月

北谷町教育委員会　『伊礼原遺跡展』　2007年８月

知念村教育委員会　『国指定遺跡　斎場御嶽　整備事業報告書(発掘調査・資料編)』1999年３月

仲宗根求・小原裕也「平成17年度浜屋原貝塚Ｂ地点発掘調査の概報」『読谷村立歴史民俗資料館紀要』第30号　2006年３月

那覇市教育委員会　『銘苅古墓群』Ⅰ　1989年３月

那覇市教育委員会　『銘苅古墓群』Ⅱ　1999年３月

那覇市教育委員会　『銘苅古墓群』Ⅵ　2005年３月

那覇市立壺屋焼物博物館　『銘苅古墓群－蘇った先祖の眠る台地－』Ⅵ　2005年２月

那覇市教育委員会　『崎山御嶽遺跡遺跡』　2005年３月

那覇市教育委員会　『神応寺跡』　2006年２月

本部町教育委員会　『瀬底島　アンチの上貝塚　発掘調査報告書』　2005年３月

光森正士・岡田健　『仏像彫刻の鑑賞基礎知識』　1999年３月

読谷村教育委員会　『掘り出された喜名焼古窯』

あとがき

本書の作成ならびに展示会の開催にあたっては、次の機関のご協力を得ました。記して感謝申し上げます。

粟国村教育委員会
アラフ遺跡発掘調査団
石垣市教育委員会
糸満市教育委員会
浦添市教育委員会
うるま市教育委員会
沖縄県教育庁文化課
沖縄県立埋蔵文化財センター
恩納村教育委員会
九州国立博物館
株式会社　芸匠
小学館
竹富町教育委員会
多良間村教育委員会
北谷町教育委員会
土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム
名護市教育委員会
那覇市教育委員会
那覇市立壺焼物博物館
南城市教育委員会
宮古島市教育委員会
本部町教育委員会
読谷村教育委員会

博物館企画展　**沖縄考古学ニュース**

平成20年１月９日　発行

編集・発行：沖縄県立博物館・美術館

〒900-0006　沖縄県那覇市おもろまち3-1-1

電話：098-941-8200（代表）　FAX：098-941-2392

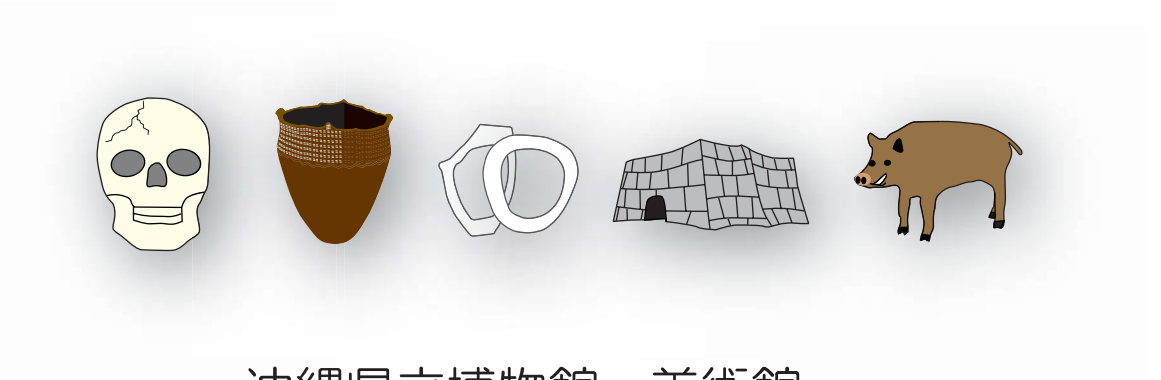
URL：http://www.museums.pref.okinawa.jp

印　　刷：株式会社　東洋企画印刷

〒901-0304　沖縄県糸満市西崎町4-21-5

電話：098-995-4444　FAX：098-995-4448

URL：http://www.toyo-plan.co.jp/



沖縄県立博物館・美術館

Okinawa Prefectural Museum & Art Museum